企画・制作　読売新聞社広告局　広告

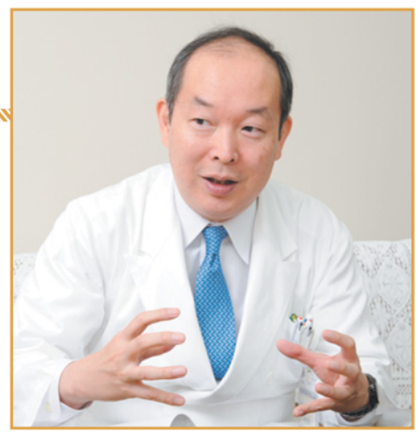
2014年11月23日読売新聞18面掲載
（転用禁止）

ADPKDをご存じですか？

腎臓専門医に聞く、その病気との上手な付き合い方

ADPKD（常染色体優性多発性のう胞腎）は、腎臓に水の詰まった「のう胞」という袋状のものが無数にできて肥大化することで、腎機能が徐々に低下していく、進行性の難病です。原因や発症後の経過、治療法などについて、我が国の腎臓領域ならびにADPKD研究と治療をリードする２人の医師に聞きました。

「ADPKD」とは、どんな病気？



東京大学大学院医学系研究科
腎臓・内分泌内科　教授
南学 正臣 先生

腎機能の低下だけでなく様々な合併症も招く難病

ADPKDは、腎臓の中にたくさんの「のう胞」ができて、どんどんと膨らみ、結果として「老廃物の排泄」という腎臓本来の働きが機能しなくなってしまう病気です。

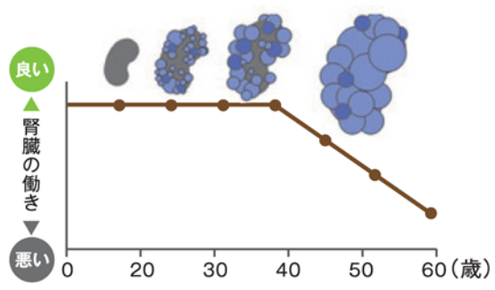
発症すると腎臓が大きく腫れて周りを圧迫するので、腰痛や腹痛、食欲の減退といった症状が起こります。尿毒症による吐き気や心不全、意識障害などの症状も起こり、やがては人工透析や腎臓移植などの治療が必要となります。

また、腎臓以外の臓器にも影響を及ぼすため、各種の合併症も表れます。例えば、肝臓や膵臓にも「のう胞」ができたり、高血圧や、心臓の弁の問題が生じたりします。脳動脈瘤を合併することもあるのですが、その破裂（くも膜下出血）は「一般の人に比べて約10年早まる」と言われていて、これは生命にも関わる深刻なことです。

国内の患者数は約３万人 原因は「遺伝子の異常」

この病気を患うのは、3千～7千人に1人。原因となるのは「*PKD1*」「*PKD2*」という遺伝子の異常です。「常染色体優性遺伝」という形式で遺伝するので、父親か母親のいずれかがADPKDを患っていれば、子どもにも50%の確率で遺伝することになります。

遺伝するタイプの腎臓病としては最も多い病気で、血液透析を受けている患者さんの中の3～4%がこの病気によるものです。病気の進行にはかなり個人差がありますが、40・50代で腎機能の低下が表れ、60・70代で透析が必要になるというのが一般的です。女性に比べて男性の方が、非喫煙者に比べて喫煙者の方が、それぞれ進行が速いといわれます。



専門家との二人三脚で進行のコントロールを

治療においては、まず血圧に注意することが必要です。血圧が高いと病気の進行を速めるうえ、他の神経・血管系の合併症の原因となりますので、適切な降圧剤の使用や塩分摂取を控えることが大切です。症状を抑えるために、尿毒素のもとになるたんぱく質の摂取を制限することもあります。

「のう胞」の成長には、細胞内cAMP濃度が高まることが関わっているのですが、最近、これを抑える薬ができました。日本では世界に先駆けて使えるようになっており、長期的な効果にも注目していきたいと思っています。

いずれにせよ、ADPKDは患者さんにとって「ずっと付き合っていく病気」です。まずはご本人が病気を正しく理解し、医師や看護師のサポートのもとで進行をコントロールしていくよう心掛けてほしいと思います。

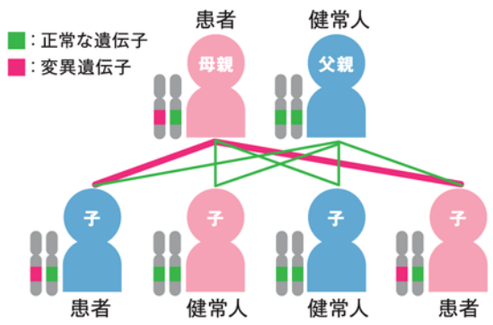
「ADPKD」と診断されたら？

順天堂大学大学院　多発性嚢胞腎先進治療学講座
順天堂大学 医学部附属順天堂医院　泌尿器科
河野 春奈 先生

検査・診断は比較的簡単 家族歴があれば検診を

ADPKDは、超音波やCT、MRIといった画像の検査で見つかります。血液検査や自覚症状によっても発見されることがあります。

遺伝性の病気ですので、ADPKDのあるご家族に勧められて来院される方もたくさんいます。家族歴があるかどうかで診断の方法が分かれており、ある場合には両方の腎臓にそれぞれ3個以上の「のう胞」があればADPKDと診断されます。



心身を幅広くケアする ADPKDの「専門外来」

私は現在、週に3回の「PKD外来」を担当しています。その主な特徴は「ADPKDに関係する相談や治療のすべてをワンストップで提供できること」です。この病気は痛み、のう胞の出血や感染、尿路結石といった症状も起きやすいのですが、それらに対する外科的な対処も行っています。また、例えば「自分はADPKDだが、子どもは検査をした方がよいか？」といった相談にも親身にお応えするよう努めていますので、ぜひ気軽に受診していただきたいですね。

もちろん、治療に関しては最先端の医療を取り入れています。従来は血圧のコントロールなど対症療法が主体でしたが、今年の3月からは「のう胞」の肥大化とそれによる腎機能の低下を抑える治療薬が使えるようになり、治療が大きく様変わりしました。このことは現在治療中の患者さん自身のみならず、将来的に発症する可能性のあるそのお子さんたちにも、大きな希望をもたらしています。また、平成27年1月よりADPKDは国の難病に指定されます。

患者会なども利用して 自分らしい豊かな人生を

当院では、医師と、患者さんやそのご家族との交流会を行っています。また、国内には「PKDの会」と「多発性嚢胞腎財団日本支部（PKDFCJ）」の2つの大きな患者会があります。患者さんやご家族にとって、同じ病気を抱える方との交流が大きな励みになると思います。

患者さんは病気に向き合う中で、時に自分の生活を過剰に制限されることがあります。当然ながら病状によって、ラグビーや格闘技といった激しい接触を伴うスポーツは控えていただくこともありますが、それ以外の運動、山登りや旅行などの趣味を楽しむ分には、ほとんど問題はありません。人工透析や腎臓移植を受けられても、仕事の第一線で活躍されたり、趣味を楽しんだりしている方はたくさんいますので、ぜひ前向きに、ADPKDと付き合っていってほしいと思います。

Otsuka 大塚製薬

「ADPKD」については専門のWebサイトで詳しく解説しています。　ADPKD.JP　検索